

### \* ブラッシャー天体写真儀の来歴

アーカイブ室新聞に何度かブラッシャー天体写真儀について書いている(251号、268号、278号、280号、281号)。ブラッシャー天体写真儀は1896年の日食観測のために非常に急いで発注され、間に合わせた望遠鏡である。この望遠鏡はその後、天体写真儀として大活躍し小惑星をいくつも発見している。1995年頃国立天文台に残すべき歴史的貴重なものの調査があった際、神田 泰氏によって候補に挙げられたが、国立天文台で保存の手が打たれず国立科学博物館にゆだねられた。そして2010年1月26日、活躍の場であった三鷹の国立天文台構内に里帰りした(写真1)。



写真1 国立天文台に里帰りしたブラッシャー天体写真儀

神田氏の調査によると、明治29年(1896年)、ブラッシャー天体写真儀は筒とレンズのみが、北海道枝幸の皆既日食観測用に購入され、価格は2,893円であったとある。レンズは口径8インチ、焦点距離120.3cm、ヘースチング型のダブルレットである。このレンズは明治31年(1898年)のインドの皆既日食でのコロナ撮影に成功し、明治34年(1901年)のスマトラ日食に使用された。明治33、34年(1900年、1901年)には平山 信が新小惑星Tokio、Nipponiaなどを発見している。また戸田光潤が明治41年(1908年)にモーアハウス彗星、明治42年(1909年)にハレー彗星の写真撮影を行っている。そして、そのころ全天におよぶ銀河付近の掃天撮影に使われた。この頃は他の望遠鏡に同架されていたようで写真2が残っている。この同架している望遠鏡はトロートン望遠鏡と思われる。

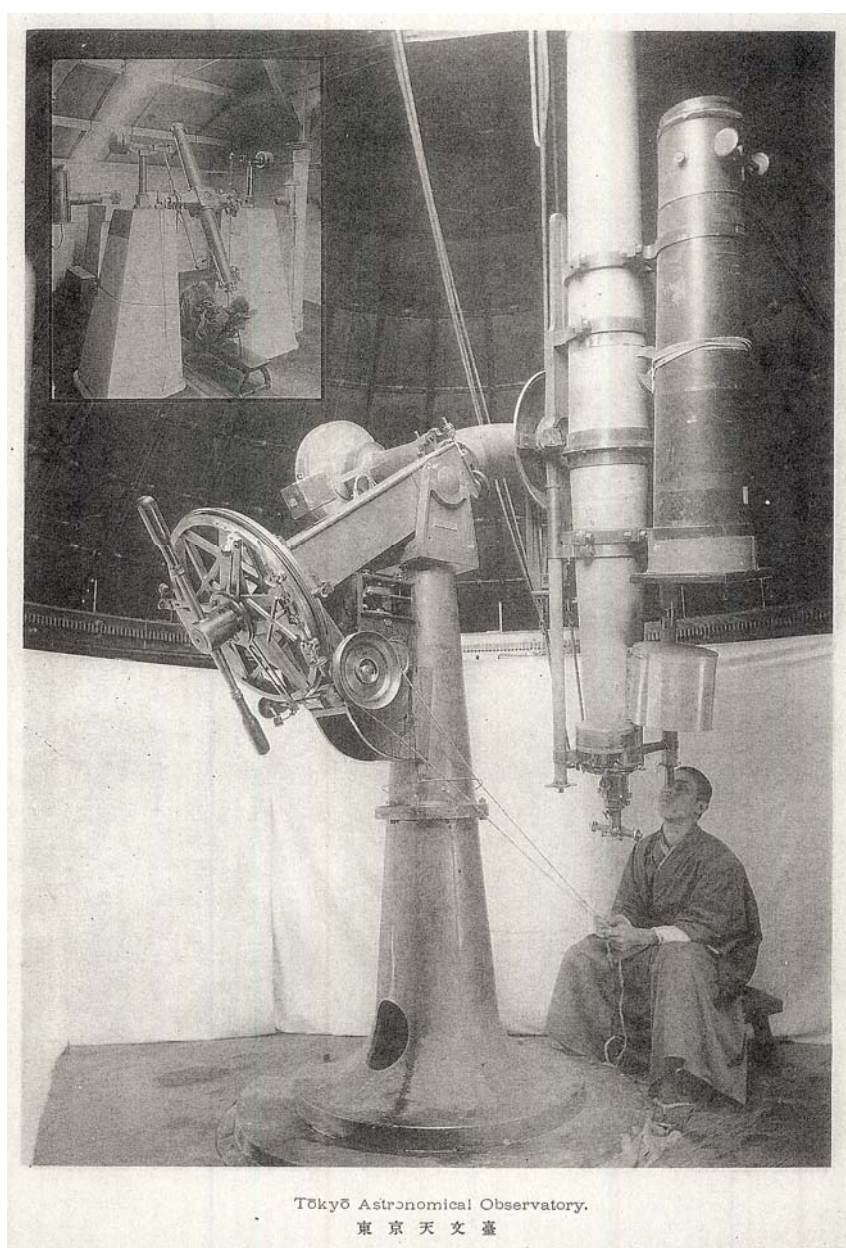
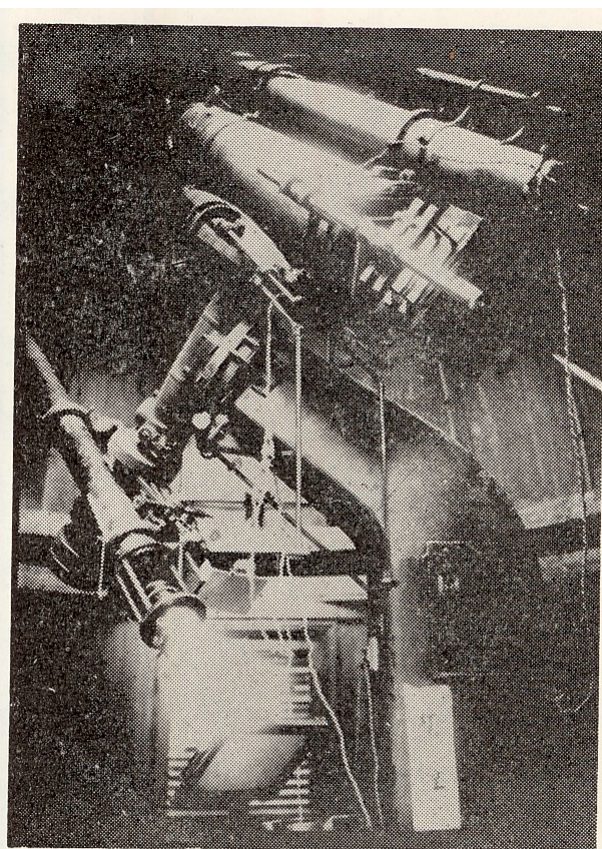


写真2 トロートン望遠鏡に同架されたブラッシャー天体写真儀

さらに、神田氏の調査によれば、明治 35 年（1902 年）に専用架台（ワーナー・スワゼー製写真赤道儀）が購入（4,814 円）され、明治 38 年に据え付けられた。

そして、明治 41 年（1908 年）ころにブラッシャーのレンズに非点収差の大きいことが分かり、製造元のブラッシャー会社に磨き直させることになった。この結果はアーカイブ室新聞 281 号に引用した平山信の記事にあるように、ブラッシャー会社は磨き直すと口径が小さくなるので、代替りのレンズを無償で提供したとある。そのレンズはベツヴァール型、ダブレット、口径 8 インチ、焦点距離 127 センチであった。この交換が行われたのは大正 2 年（1913 年）のことであった。製作納入後 12 年を経てのクレームであるが、ブラッシャー会社の良心には感じ入る。

大正 12 年（1923 年）の関東大震災による麻布の東京天文台壊滅により、大正 13 年（1924 年）には東京天文台は三鷹に移転し、破壊をまぬがれたブラッシャー望遠鏡も三鷹に移転している。昭和 2～5 年にはこの望遠鏡で及川奥郎が小惑星 8 個（「みたか」、「たま」、「すみだ」、「はこね」、「あたみ」、にっこう」、「とね」、「ふじ」）を発見している。この頃は同架された 11cm シュタインハイル太陽望遠鏡と共用（写真 3）で昼夜、観測に使用されていた。



Ⅱ-8 ブラッシャー天体写真儀  
（麻布時代）

写真 3 太陽望遠鏡を同架したブラッシャー望遠鏡

昭和 11 年（1936 年）には対物プリズムを併用して北海道北見の日食観測に用いられ、昭和 17 年（1942 年）には対物プリズムを併用してとも座新星を観測している。

昭和 20 年代にはドームスリットを両開きに改造し、太陽望遠鏡を外し、ツアイス製 16cmASTRO-TESSAR レンズの天体写真儀を同架して 2 連望遠鏡に改造している。この改造は富田弘一郎、香西洋樹の両氏によって行われたことが分かっている。

昭和 40 年（1965 年）には、ブラッシャー天体写真儀の更新の予算が認められ、50cm シュミット望遠鏡が制作された。この 50cm シュミット望遠鏡は、最初は三鷹に置かれたが、堂平観測所に移設され、平成 12 年（2000 年）堂平観測所閉所に伴って国立科学博物館にゆだねられた。昭和 43 年（1968 年）、ブラッシャー天体写真儀は北海道旭川で小惑星イカルスの地球接近の観測に使用されたのが最後の出番で、長い眠りについた。

ブラッシャー天体写真儀が置かれた三鷹のドームは、平成 7 年（1995 年）3 月に取り壊され、望遠鏡本体は 65cm 赤道儀望遠鏡ドーム脇にシートに包まれ置かれていたが、1996 年 7 月には国立科学博物館新館竣工に伴い、新館でのわが国の近代天文学の発展に貢献した貴重な資料として展示されるために国立科学博物館に譲渡された。

神田氏の調査によれば、1996 年 1 月の段階では、愛知県犬山市にある「博物館明治村」から譲渡希望が寄せられていたそうである。神田氏は、明治村はよく知られているように、往時の状況をそのまま再現して入場者に見せているので、このブラッシャー望遠鏡も、明治時代（麻布時代）を再現することを想定して、多くの人々に楽しんでもらえたらブラッシャー望遠鏡にとっても幸せなことだと思いと記してある。

幸か、不幸かブラッシャー望遠鏡は「明治村」の手に渡らず、国立科学博物館に譲渡されたのは幸運であったと思う。そして国立天文台に天文機器資料館開設に伴い里帰りできたのはさらに幸運であったと思う。写真 4 は 2 連天体写真儀だったころの雄姿である。

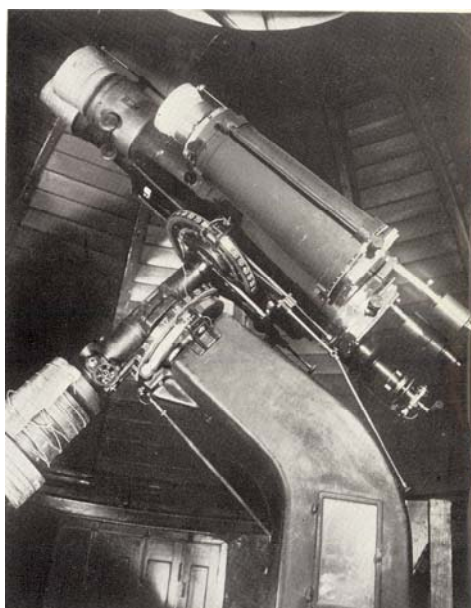


写真 4 三鷹時代の 2 連天体写真儀だったブラッシャー望遠鏡